東北大学機械系
同窓会ニュース
第3号

東北大学機械系同窓会
980-77　仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学工学部機械・知能系内
電話　(022) 216-8126
FAX　(022) 216-8180
郵便振替口座
番号　02270-8-11176
名称　東北大学機械系同窓会
印刷　笹氣出版印刷（株）

随筆　海外から帰国して思うこと

駒米　礼二郎（機39）

車両の開発を海外から支援する目的で、一九八九年からアメリカのミシガン州アナーバに四年、引き続きドイツのフランクフルトに四年駐在員として赴任し、本年三月末に帰国した。この間の海外生活は新たな経験の連続で、それぞれに思い出深いものであるが、日本に帰国し生活を始めてみると、改めて日本と西欧との違いを感じることが多いので、自分の独断も交え記してみたい。

東京にいて強く感じることの一つに、「人と人の肌の間隔」がある。通常の西欧人は、一メートル以内に他人が接近すると、恐怖感を覚えると聞くが、長年海外にいると、同じ感覚になる。この至近距離は、東京では電車・エレベータ・駅の雑踏などで日常経験することであるが、広い空間で生活する西欧人にとっては煩わしく、日本の極端な中央集権化が創出した世界に類をみない大東京首都圏と人口の超過密さの所産であろう。西欧各国は基本的に地方分権を主体とした農業国であり、生活構造も日本のものとは根本的に異なっている。

この人口過密さは、種々の面での「効率」に影響している。東京の電車などの大量輸送手段の効率さ・利便さは確実に世界一であろうが、個人乗用車の効率は最悪である。ドイツにおける乗用車のライフ総走行距離は三十万キロメートルを越えると思うが、日本では高々十万キロメートルであろうし、優れた耐久性を持つ日本車は、劣悪な道路事情のため走れないまま廃車にされ、また渋滞による燃費の悪さも露呈する。

人的な労働の効率も気になる点である。夜十時過ぎに電車に乗っても、会社帰りのサラリーマンとお酒を飲んだ人達でほぼ満員状態で、欧米では考えられない光景である。ドイツ人の年間休暇は平均三十日あり、例外なしにこれを消化する。病気休暇はこれとは別に、二日までなら、電話連絡だけで休めるし、医者の診断書があれば、ほぼ無制限に休める。休暇も取らず、朝から夜遅くまで孜々（しし）として働く日本人（一部上級管理者を除き）と、定時で帰宅し、余暇を楽しみながら生活を送るドイツ人との差を考えると、我々日本人の労働に消費するエネルギー効率はどうなっているのかと、考えさせられてしまう。ドイツの街・家並みは概して統一されていて美しく、家構えも立派で大きい。二、三百年前の家がメンテナンス良く受け継がれ、現代においても少しも違和感を感じない。日本の家はといえば、ローンでやっと取得した家は、狭い・古いが故に寸時にしてつぶし、建て替えられてしまう。先代の努力・労力や、資源が無駄使いされている気がしてならない。

日本との違いでよく引き合いに出されるのが、「サービス」の問題がある。ドイツには有名な閉店法があって、土曜の午後二時（最近若干緩和されて四時）から日曜にかけてほぼ全店が閉まる。例え客に買う意志があっても、時間がきたら追い出されてしまう。「決められたことは守る」の精神がこの融通性のなさにつながっている面もあろうが、それにしても、店員の愛想のなさ・尊大な態度には耐え難きものがあり、日本のサービスがなんとも有り難く感じられる。ただ、若干サービス過剰のものもあり、ガソリンスタンドの給油などは、欧米同様セルフでいかがでしょうか。

ドイツは、環境を守る国として見習うべき点が多い。燃える・燃やさない・リサイクルに区分したゴミ収集は当然のこととして、それ以外にボトル（青・白・茶に区別）、古紙、古着、靴を区別して入れられるような収集タンクが各所に配置されている。燃費や排出ガスの良い車の購入インセンティブとして税制優遇が導入され、また夏にオキシダント濃度が規定値を超えると警報が出され、アウトバーンの最高速度が規制されるが、ドライバーが違反罰則がないにもかかわらず、自主的にこれを守る点がすばらしい。もっとも、これだけ徹底するのであれば、環境に有害なアウトバーンでの最高速無制限は止めたら良いのに、そこは既得権を主張するドイツ人らしく、直ぐには譲らないのがおもしろい。

ともあれ日本に帰国し、喧騒・狭隘（あい）な雑踏・生活環境にある種ストレスを感じながらも、美味な日本食、無意識でも理解できるテレビ、超高価だがサービスの行き届いた日本的ゴルフなどを堪能しつつ、時にはるかなるドイツやアメリカの風景・建物に懐かしさを感じる今日この頃である。

（こまごめ・れいじろう　三菱自動車（株）技術本部）

会費納入のお願い

同窓会は、会員皆様が納入される会費によって運営されています。同封の振替用紙を使って会費納入をお願い致します。年二千円です。

日本人留学生の質は落ちたか？

亀田　純（機45）

四十年アメリカに住んでいる日本女性がおっしゃった。

「この頃の日本人留学生は質が落ちましたよねえ」

彼女はその頃白人一色のアメリカ中西部にやってきて博士号を取り、結婚をし、子供もふたり生産し、その上六十歳にして離婚をしたあと再婚も成し遂げ、今も現役の教授という剛の人で、僕にとっては故郷の母と妻の次に恐れおののく人だ。

「大体、私が来た頃は優秀なエリートしか留学して来ませんでしたが、今は大学をどこもすべった人とか、日本社会の落ちこぼれとかばかり来るんじゃないですか」

エリートが来た頃と、落ちこぼれが来るようになった頃とのちょうど狭間（はざま）に渡米した僕は、どちらかと問われれば落ちこぼれの範疇（ちゅう）であろうと内心ギクッとし、目線を落として謹んでこのご意見を承った。

しかし彼女がこのようにフラストレーションがたまるのも無理もないところがある。大学の日本人留学生達でつくっている日本人会の顧問として、彼女は種々雑多の苦情窓口の役を引き受けているのだ。他の国々と比べて日本人達が自治体のボランティア活動に参加したがらない、などというあちらさんの苦情、それに

対して、アメリカ人達は文化紹介するのは外国人の義務と思い込んでいる、と文句をいう日本人学生のなだめ役、その他学生同士のケンカ仲裁など、ものぐさな僕などちょっと聞いただけでもいよいよ頭があがらなくなる。そうして彼女は自然、日本人留学生達が引き起こす様々な愚行を知り尽くすことになる。それで先程のため息まじりのご意見となるわけだ。

今でも口の端にのぼるのは、ガールフレンドとけんかして警察に逮捕されてしまった男子学生だろう。大げんかして、殴ってきた女の子（近ごろの女の子はほんとに元気だ）に一発平手で返したら、その子が怒って警察に電話をしたのだ。警察官に、殴ったか？　と聞かれ、言い訳などするのは男らしくないと、何も言わずにうなずいて認めた日本男子も馬鹿だった。そのままその子は留置場にぶちこまれた。そして翌朝の地方新聞に「日本人学生婦女虐待」の記事がでかでかと載った。ほとんど事件のない、暇をかこっている田舎町とは怖い。日本人会顧問の彼女は、将来ある子にせめて逮捕歴だけはつかないようにしようと、大学の上の方にも手を回して警察と交渉した。いわく、これは文化の違いで、少しの暴力にこれほどの制裁があるとは被害者さえも思いもよらず……いわく、日本はいまだ男尊女卑の傾向があり、男子が自分の女なるものに手をあげるのは遺憾ながら日本文化ではそれほど珍しいことではなく……。少しばかり現代の日本事情と異なっても仕方がない。さぞかし彼女も説明に苦しんだことだろう。疲れ果てるのも無理はない。

しかしなぜ日本人留学生の質が落ちたといわれるのか。やはり原因は、円高となって一部の金持ちとかエリートだけでなく、一般の人達も大勢留学できるようになったからだろう。玉石混淆（こんこう）の大勢となると、質の良いのより悪いのが目立つものである。しかし僕としては、凡人がどんどん留学できるというのは大いに結構と思っている。

昔は天狗の鼻の上に、もうひとつ天狗の鼻をつけたようなお偉い方々だけが留学なさって、（これは落ちこぼれのひがみか）背中に日本を負んぶした気になって戦々恐々として外国に行ったものだが、今は違う。どこにでもいる男の子、女の子が「ちょっと語学研修」と称して軽く留学する。彼らにはひと昔前の留学生達と違って悲愴感がない。日本人は外国に在住すると、徹底的に日本人を避けるか、さもなければ国粋主義者となって日本人同士だけでつるむと前にはよくいわれたものだ。どちらも同じ卑屈さからくる、くだらないことだ。今もそういった人達はいる。

しかし、この頃の軽い若者達にはそれが減っているようだ。語学力は拙（つたな）いとはいえ非常におおらかに人々に交わっているのが多い。卑屈さがあまり感じられないのだ。そういう彼らを見ると、バブルがはじけたとはいえ、これこそ日本の繁栄の賜物だ、と結構気分がいい。

質が悪くなったとそしられてもいいではないか。こういう留学生達が今後もどんどん増えればいい。そうしてできるなら「ちょっと語学研修」以上のことを学んで帰国してほしい。人種、文化、宗教などの多様性が世界に存在することを、理屈ではなく文字どおり身体で体験する人間が多くなれば、画一日本社会の弊害も少しは改善するかもしれない。外から圧力をちょいと加えられただけで右往左往するおべっか使いになったり、旧態にしがみつくコチコチの国粋主義者にもなったりする今の日本に、うたい文句だけではない国際化を呼び込むのは彼らかも知れないと、実はひそかに期待しているのだ。

（かめだ・じゅん　Iowa State Univ. Ames Laboratory）

同期会ニュース
機械工学科「十八（とはち）会」
機械十八年卒同期会

大東亜戦争たけなわであった昭和十八年九月に機械工学科を卒業した我々の同級会を「十八会」と名付け、終戦後の昭和二十一年から毎年欠かさずに、日本機械学会の春の総会講演会の日時に合わせて、三月末または四月始めに東京で開催し、その席において、近況の報告、仕事内容の説明等をし、友好を温めて来た。しかし数年前からは級友のほとんどが第二の職場をも退いているので、前記のような日程上の束縛がなくなり、随時適当な日に開催されるようになった。

本年は、級友の一人の好川紀博君が自身の喜寿を祝っての、これまでに描いた油絵の個展を、二月中旬に横浜市内のギャラリーにて開くということであったので、その激励をも兼ねて、本年の「十八会」は二月十三日に横浜で開催することになった。このような寒い時期における開催は始めてである。

当日は午後、個展が開かれているギャラリーに集合し、同君の力作を観賞しながら称賛かつ批評激励した後、近くの中華料理店「養成軒」に一同移動し、本年度の「十八会」を開催した。齢七十五歳を既に越した現在では、卒業時二十三名いた級友も今は十五名に減り、淋しい限りであるが、仙台から参加した小生らを含めて級友十二名、同伴夫人三名の合計十五名が元気な姿で集まった。一年振りの顔合わせのため大いに話がはずみ、時の経つのも忘れる程であった。近況報告では、最近出掛けた海外旅行の話、相変わらずのゴルフ行きの話、またそれぞれの趣味の話などが続いた。趣味として絵画を楽しんでいる者が数人いて、しかもヨーロッパ辺りにまでスケッチ旅行に出掛けているとのことである。また卒業後五十年以上経った今日でも学生時代の楽しかった話、苦しかった話などの思い出話が多数飛び出しても来た。一方お互いに歳のせいか健康に関する話題も多くなってきたこの頃の「十八会」である。本年の健康に関する話題の中心はタマネギワインであった。

約三時間、飲みかつ食べながらゆっくり歓談の後、名残を惜しみつつ、元気な姿での来年の再会を約して別れた。

本年の参加者は次の通りである（敬称略）。

後列左から　石川勝次郎、好川紀博、柳沢和男、関戸義人、野口伸、杉浦尚、中西正雄、内崎忠、牧貞夫、萱場孝雄

前列左から　植草敏之、松本三郎、好川夫人、萱場夫人、柳沢夫人

（萱場孝雄（機18））

機械十八会、平成9年2月13日、横浜にて

青機会だより（機械二十年卒同期会）

青機会については、同窓会誌創刊号六頁の川島氏の記述を参照されたい。今年（平成八年）は呉市の福村君と東広島市在住の私が幹事を担当して、十月二十八日―三十日の間、参加者二十名で博多―杖立温泉―阿蘇山―熊本―雲仙温泉―長崎―有田焼窯元の順に北九州遊覧の青機会となりました。バスの長旅による疲れを心配しましたが、素晴らしい好天に秋の山々や海の景色に疲れを忘れて楽しみました。

最初のホテル「ひぜんや」は大分県と熊本県にまたがっているので、ちょっと股を開いて立つと、右足は大分県、左足は熊本県を踏まえることになります。翌朝ホテル前で記念写真を撮り、八時三十分頃に出発したのが幸運のきっかけとなり、阿蘇の外輪山の内側一杯に漂う雲海に出会いました。ガイドさんは十年以上のベテランだと言うのにこんな雲海を見たのは初めてとか。これは時刻、気温、早朝の放射冷却、気流等沢山の条件に支配されるようです。阿蘇は活火山ですが噴火口に至るには、牛馬の放牧場である草千里の牛馬優先道路を走りますが、丁度道路のセンターラインを悠々と歩く牛のために、我々のバスも反対車線から来た乗用車もしばらくは路肩に寄って停車するはめになりました。こんな珍事を経験しながら、熊本市の水前寺公園に立ち寄り、熊本城を横目に見ながら三角港からフェリーで島原港に至り、雲仙温泉に一泊。島原半島の中心に位置し数年前に噴火して多くの犠牲者を出した普賢岳は、百数十米の溶岩流を噴出してマグマの活動を休止しており、平成新山と呼ぶらしい。長崎のグラバー邸では百年に一度しか咲かないという「そてつ」の花を見たり、有田では柿右衛門の陶器の美しさに魅せられたりしながら、一年ぶりの旧交を温め、今回参加しなかった会員を含めてお互いの健康を祈り、来年も元気で再会することを約して解散しました。

（宝諸幸男（機20））

青機会（機械20年卒）の九州旅行

前列右から　宝諸、梅田、永倉、新、原田、菅谷、若月、バスガイド

後列右から　添乗員、梅田、宝諸、若月、新、松安、松安、菅谷、紺頼、斎藤、福村、福村、原田、永倉

機械二十八年（旧制）卒同期会

私たちのクラスはよくまとまったクラスで、イベントに運動に学生生活をフルに楽しんだクラスです。その雰囲気は、学生時代から四十四年も経った現在まで続いています。いまや活動はますます活発になり、親密の度を加えつつあります。まだまだ元気なメンバーが多く、時間を持て余すことなど知らない人たちです。集まれば和やかでそれぞれ個性あふれ、年齢層も幅広く、最大幅は十歳以上と多士済々で、楽しい愉快なメンバーです。振り返ってみると、このようなクラスに入れたことが本当に有り難いし、また誇りに思っています。

在学中の思い出は、卒業アルバム作りです。クラスのメンバーで撮影し（ほとんどは岩下君ですが）、手分けして研究室の暗室で夜遅くまで焼き増ししました。それをアルバムにはって作ったものです。研究室の様子から学内の行事・レクリエーション、更に仙台の町の風景までよみがえってくる素晴らしいアルバムが出来上がりました。この作成には皆何らかの形で参加していて、自分たちで作ったことがより一層思い出を深めてくれます。それでも卒業後の数年間は、それぞれ新しい生活のためしばらくは集まる機会もありませんでした。私はしばらく九州にいたので、その間のことはなおさら分かりません。

クラス会を始めたのは、ほぼ昭和三十九年と思われますが、余りはっきりしません。明らかなのは昭和五十三年の仙台開催以降で、その後六十一年までは一、二年おきに、昭和六十二年からは毎年開催して現在まで続いています。平成三年には仙台の茂庭荘の鐘景閣で行い、一泊して盛大に行いました。その時は、斉藤先生、武山先生にもご出席頂き、武山先生は一緒に泊まられて夜中の二時まで碁を付き合って頂いた思い出があります。

最近は昨年の十一月九日に竹芝の竹泉で奥様方も含め参加人員三十名の盛況でした。その時の幹事は加藤襄二、佐藤昭二郎、石橋裕昭の諸君でした。ここにはその写真を載せてありますが、皆さんそれぞれに年季が入って、堂々たる雰囲気が感じられます。このクラス会の幹事は原則持ち回りですが、出来ない人には押しつけずに、やれる人にお願いする習わしになっています。

機械28年（旧制）卒同期会（8年11月9日）

このクラスでは在学中にクラス会誌「フリーハンド」を五号まで発行しています。平成二年にはこの復活が計画され、世話役のご苦労で第六号が発行されました。その後昨年は十二号と毎年発行が続いています。ほぼ百ページの堂々たる会誌で、編集者は最近は機械屋で小説家の石橋君にお任せしています。

またこの数年来は、周辺活動も活発になり、まず「フリーハンド囲碁の会」が平成二年に始まりました。初めは年一回の開催でしたが、昨年から年二回に増え参加者も二十名に近づく盛況で、宮崎七段の指導で進めていますが、大盛況で碁盤の調達にはご苦労を掛けているようです。また昨年末から俳句の会も始まり、松川君の指導で毎月約十名が句会を楽しんでおり、「青葉句会」と名付けられました。更にはゴルフの会も今年から開始され、年二回のコンペを楽しむ予定と、余裕たっぷりです。年一回のクラス会はもとより、これらの会には奥様方も任意にご参加頂いており、特に一昨年亡くなった伊

藤秀稲君の奥さんはクラス会・句会と精勤して楽しんで頂いています。一方では学生時代のコーラスグループも続いていて、クラス会での美声の披露や二次会での歌い込みなど活発な歌声で青春をしのんでいます。また亀島君は虎ノ門交響楽団のメンバーで、毎年の演奏会を聞きに何人かが集まるという多彩ぶりです。

近頃は、皆さん余裕が出てきて更に新しく多方面に趣味を広げています。時折それらの特技が披露されて楽しませてくれます。このように我がクラスは、見事にまとまり元気にあふれています。我々のこれからの余生を楽しくしてくれる素晴らしいクラスです。今後ますます親睦の度を深めていくことで、元気の持続に役立つことを期待して筆を擱きます。

（大久保博之（機28旧））

青葉三十機友会（機械三十年卒同期会）

山紫水明の広瀬川を見下ろす片平町の工学部キャンパスに通った四年間は、今のように物資の豊かな時代ではなかったが、心豊かに充実した青春であったと思う。

当時の機械工学科には、世界的にも高名な抜山先生や、沼知先生を擁し、直接、両先生の講義を受けられたことは、我々の誇りであり学問のみならず、人格形成の上でも忘れることが出来ない。

卒業の昭和三十年は、運悪く不況に見舞われ、希望の会社に就職出来なかった人も多かった。それぞれの道を進む中で、戦後の驚異的な高度成長期を経て、二度にわたるオイルショック等、社会、経済情勢の変革の中で、進路変更を余儀なくされた方も多かった。

同期五十七名の中、約二割近くが在仙高校の卒業生だったせいか、卒業後も折りにふれて集まり飲む機会も多かった。これが同期会の萌芽となったのか、この頃の記録がなく今となっては定かでない。

昭和五十年七月、卒業後二十周年を記念して東京池袋に武山先生をご招待、三十名が集まった同期会から記録が作られるようになった。幹事は名簿順に持ち回り、幹事都合で開催日が不定期に決められていたが、昭和五十五年から一年おき開催のルールも決定し、毎回約三十名が集まり順調に継続されて来た。

平成二年からは毎年開催となり、平成四年には会の規約も制定、会名称も「青葉三十機友会」とし初代会長に小林陵二教授を選任した。歴代幹事のやり繰り上手により、会費繰越金も増えて来たこともあり、卒業四十周年を記念して何か各人の記録を残そうということになり、会誌の出版が計画された。

執筆の内容は、各人の自由とし、学窓時代から卒業、現在に至るまでの生い立ち、考え方、今までやって来たこと等、同窓の友が歩んで来た足跡を記したものとした。石巻専修大学の植西君が編集の任を引き受けられ、会員の協力もあり、三十五名のアルバムが立派に出来上がった。

早いもので、卒業後四十周年を一昨年平成七年に迎え、四月桜咲く懐かしの仙台で開催した。当日は、夫人同伴で三十二名が出席し、青葉山の工学部キャンパスの見学を行った後、青葉記念会館で総会を行い、武山先生から「粋（いき）な裕（ゆと）り」と題した記念講演を頂き、感銘を深めた。

昨年は、関西在住の会員の要望に答えて初の関西開催となり、新緑の古都奈良で旧交を暖めた（写真）。

青葉三十機友会（機械30年卒）、平成8年、奈良にて

今、我々のほとんどが現役を退き、それぞれの人生を楽しむ年代に来て、同期会の存在価値も大きく、出来るだけ多くの会員に喜んで頂くよう考えている。

本年は、八月に隅田川で屋形船に乗り花火を楽しむ会として計画している。会員各位のご健勝を祈願しております。

（青葉三十機友会事務局　広田　孝（機30））

機械三十二年卒同期会　四十年目に開催

「樹の実会」と称する我ら機械工学科三十二年卒同期会は、今年卒業四十周年を迎え、それなりに年輪を加え、今を盛りと会社の要職にある者・既に人生の一事業を全うして満ち足りた人生を送っている者・いまだに機械屋の夢さめやらず未練がましく技術を追いかけ回している者など、それぞれに人生の一断面をにぎやかに呈している。

「樹の実会」の由来は我々が卒業の年に、各人の青春の思い出をつづって文集に残そうではないか、そしてその文集の題名をクラス全員が投票した結果、圧倒的な指示を得て決まったのが「樹の実」で、今は小さな実の集まりであるがそのうちに一つ一つが大木に成長しようという意味で、永井君の発案によるものであった。

陽春の五月十八、十九日に「那須」の地で第三回目の「樹の実会」が開催された。集合時間のはるか前から、北は八戸から、西は大阪・三重・富山からはせ参じ、一風呂浴びてにぎにぎしく宴会が始まった。樹の実会総員五十六名（卒業時六十一名中残念ながら五名が逝去）中三十名が出席し、八名の夫人が花を添えてくれた。宴もたけなわの頃、各人が一分間の近況報告となったが、一分間が二分、三分となり野次が飛び交い、声の大きい者が勝ちといった状況に陥った。ようやく各自のスピーチが終わった後は、そのままカラオケホールへとなだれ込み、素人ばなれした歌あり、女性の合唱あり、デュエットあり、とうとうマイクが回って来ない者もあり、夜も更けきった頃に散会となった。それから更に杯を重ね往時を語り合ったグループ

樹の実会（機械32年卒）、ホテルエピナール那須にて

もあった。

翌日は各自の車に分乗して、那須高原に今なお煙を吐く茶臼岳の九合目までケーブルで登り、関東一円、筑波・日光の連山まで眺望するはずであったが、あいにく霧のためそれは出来なかった。それから更に足を延ばして、かの有名な八幡の「野つつじの樹群」が今を盛りと咲き誇っている様を目の当たりに見て、一同感激の極みであった。このように見事に咲いているのは、地元の人でもなかなか見られないとのことであった。そして山を下り、「那須のそば」に舌鼓をうって、また会う日までお互いに元気で居ようと誓い合って別れた。

これからは時間も金（これは個人差があるが）も出来る年代になったので、正規のクラス会のみならずゴルフ、旅行、食事会など適時幹事を決めて行おうとの意見が多かった。

人生の正に青春の一時期に「杜の都・仙台」において結ばれたこのグループの友情を、これからもみんなが大事にして行こうと誓ったことであろう。（渡部栄久（機32））

平成九年度通常総会予告

○開催日　平成十年五月二十三日（土）

○場　所　東京・新宿・東京大飯店

設立総会と同じ会場です。多数会員のご出席を期待しております。

機械三十七年卒同期会

我々のクラスはまとまりが良く、卒業してからも何回となく同期会をもって旧交を温めてきた。今回二年ぶりに、平成八年三月十六、十七日千葉県で集まりを持つことが出来た（これまで二回に一回位の割合で恩師をお呼びしていたが、今回は遠方であることと寒いシーズンのため我々だけの会とした）。慣行的に企業別に幹事を決めていて、今期はトヨタ自動車と新日鉄の六人が担当した。一泊二日で君津市の新日鉄白溪山荘に元気いっぱいのOld Boys（but young in spirit）が集まった。

白溪山荘はJR内房線君津駅から車で三十分、標高三百メートルの山腹にある新日鉄の保養施設である。夕方や早朝には山荘から眼下に白い霧の帯が広がって見え、名前の白溪はここから出たのではないかと思う。気の早い十名は前日の十五日の夕刻から山荘に入って酒盛りをやっていたが、翌十六日はゴルフコンペである。会の名前は二年前秋保温泉近郊で行った第一回のとき、「とんぺコンペ機械37」と命名された。

白溪山荘に隣接するザ・鹿野山カントリークラブでのコンペ参加者は四組十六名となった。結婚されて船橋市に在住のS君のお嬢様も参加され、この紅一点が容姿に合った華麗なフォームでスイングされ、スコアも父君より良く、並み居るおじさん達を圧倒した。ここは鷹巣南雄、横山明仁プロが所属するこの辺りでは割に知られたコースである。山岳コース特有のアップダウンのきつい、しかし随所に豪快なショットが楽しめる、戦略的にも面白い設計がされている。当日は晴天だったが、春の房総半島特有の強い風が吹いて、コンディションは必ずしもよくなかった。しかし気の置けない仲間同士のプレーは軽口が飛び交い楽しいものである。

ゴルフから上がると山荘に戻って風呂に入り、浴衣に着替える。その頃になるとコンペに加わらなかった人達も集まってきた。皆さん額から上の方に個体差があるのはやむを得ないが（失礼！）、気分は学生当時と全く同じで、再会を喜び合い、しばしビールとつまみで歓談する。

その間大広間には宴会のセットがされていた。集まったのは全部で二十五名、クラスの約半分が顔をそろえたことになる。ほとんどが民間企業では大企業に就職したが、一部役員になって残っている仲間を除いては、五十五歳から系列企業に移ったり職種を変えたりして第二の会社生活を迎えている。

冒頭は「とんぺコンペ機械37」の表彰式、幹事としてはゴルフに不参加の人が退屈しないか心配だったが、これは全くの杞憂で、スコアを肴に、あるいは栄えの受賞者の挨拶で早くも和気藹々の雰囲気となった。

それからアルコールが回り食事が進むなかで、恒例の各人から近況報告を聞く番となった。会社のPRやら、家族のこと、趣味の話など卒業後三十三年にもなると、皆さんのたどってきた道はそれぞれが重みと彩りを持っているように思われる。

三菱電機に勤務するU君は阪神大地震で伊丹の自宅が全壊する被害に遭われ、当時の詳しい状況やアドバイスをしてくれた。自宅再建の費用は全く個人負担など我々が知らない事実も紹介された。幸い新居完成も間近とのことだった。またお嬢さんがイタリア人と結婚してローマでの挙式に行ってきたという人がいたかと思うと、「実は自分の娘もドイツ人と結婚した」という紹介もあり、国際結婚も珍しくなくなったと痛感する。

趣味では登山も数人いた。K君とHi君は何と針の木岳でばったり会ったそうだ。Ha君のように日本画で玄人の領域に達して秋には上野の美術館に出展している人もいる。

日立製作所で永年環境、エネルギーの研究開発に従事されてきたHi君は、北海道大学機械工学科教授として学究の世界に踏み出すことになり、同期会が終わるとすぐに札幌に赴任するという。岩手大学工学部教授のY君ともども機械工学の分野で大いに活躍されるよう期待したい。

こうして夜の懇親会は大いに盛り上がった。懇親会の後、それぞれ部屋に戻ってからまた酒を飲み交し、昔話や、仕事、家族のことなどだべりあったことはいうまでもない。

なお電気通信大学教授のI君は平成六年十二月病に倒れ、長い入院を余儀なくされている。学生時代には秀才でならし、教授になってからは学会で数々の業績を上げられている同君の一刻も早いご回復をお祈りする。また幹事の一人F君の奥様はこのあと一カ月後思いもかけない病で急逝され、日頃元気だった方だけに今もって信じられない思いである。ご冥福をお祈りする。

次回は平成十年関西地区で行うことになり、住友金属、神戸製鋼所が幹事と決まった。

最後に会場やゴルフコースの予約で大変お世話になった新日鉄君津製鉄所人事室に感謝申し上げます。

（矢崎陽一（機37））

精密五十一年卒同期会

昨年九月、精密五十年卒同期会を松島の同期生（中村久寿君）が経営する「松島ロイヤルホテル」で開催。大量留年時の学生で七十六名中、二十名ほどの参加があり、十年前の第一回同期会、はたまた、二十年前の学生時代を想い起こし、夜遅くまで話に花が咲きました。酒井高男・箱守京次郎両先生も出席して下さいましたので、更に盛り上がりました。次回は平成十二年の予定。

（安島隆一（精51））

会員の訃報（敬称略）

ご逝去を悼み、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（平成九年四月、同窓会ニュース第二号発送後事務局で入手したものを掲載しました。）

石井　正樹	（機大14）	8・11・19
早坂浩一郎	（機大15）	8・12・29
石川　浩二	（機8）	3・7
大島　景次	（機9）	9・1・16
福島　茂	（機13）	8・6・18
高山　雋三	（機16・12）	7・12・1
牧村　忠利	（機16・12）	4・7・1
幸田恵一郎	（機19）	9・4・1
田村　直治	（機25）	7・12・3
菅　浩三	（機26）	8・10
平井　滋郎	（機26）	8・4・22
小野寺由也	（機29）	8・4・8
古賀　基之	（精29）	9・6・24
清水　保雄	（機30）	8・10・30
原田　良一	（機30）	8・12・12
岸　徳郎	（機31）	9・4・20
塙　俊郎	（機32）	9・1・1
多胡　武雄	（機38）	9・2・23
五十嵐　聡	（精41）	8・10・26
吉田　進也	（精43）	6・6・16

お願い　会員死亡の時、氏名・学科名・年次・死亡日・住所をご連絡下さい。会長名の弔電を差し上げます。

・旧精密系以外　東北大学工学部　機械系太田教授　022-216-8126

・旧精密系　齋藤馨　03-3930-8870

又は大池弘一　0427-91-5021

平成八年度通常総会報告（敬称略）

平成八年度通常総会は、平成九年五月三十一日（土）、宮城第一ホテル（仙台市宮城野区榴ケ岡1―2―45、JR仙台駅東口）にて開かれた。

第I部　総会の行事（14時―同45分）　猪岡光（機38）の司会により開会。猪岡が開会を宣言し、玉手統（機17）が会長挨拶を行った。続いて、会則第十条により、玉手会長が議長席につき議事に入った。

1号議案「平成七・八年度事業報告」を太田照和（機40）、それに関連する「出版事業報告」を大池弘一（航20）、2号議案「同年度決算報告」を庄子哲雄（機45）及び「監査報告」を石井敏夫（機26）がそれぞれ行い承認を得た。次に議長から3号議案「役員の任期と改選」が提案され、役員の任期を会計年度に合わせることと、阿部博之（機34）から手島恒男（機27）への監事の交代が承認された。続いて、斎藤馨（精28）が、4号議案「平成9年度事業計画」を提案し了承された。次に太田照和から5号議案「阿部総長への記念品贈呈」が提案され、満場一致で承認された後、玉手会長から阿部総長に電子オルゴール付き置時計が贈呈され、阿部総長が謝辞を述べた。

第II部　特別講演（15時―16時5分）　講演に先立ち、太田照和による講演者の紹介があり、松下電器産業（株）副社長杉山一彦（機35）が「エレクトロニクスとこれからの社会」と題して特別講演を行った［講演要旨を同窓会誌第二号（平成十年三月発行）に掲載の予定］。

第III部　懇親会（16時10分―18時10分）　庄司克雄（精39）の司会により開会。副会長酒井高男（航19）の挨拶の後、萱場孝雄（機18）の乾杯により懇親会に入った。宴会の途中で谷昌義（航19）と宮坂紀子（宮坂名誉会長夫人）の挨拶があり、太田照和が学科の新築状況について説明した。その後、宴たけなわの中をぬって、神山新一（機32）、渡辺裕（機47）、升谷五郎（機II46）、村田稔（精46）及び佐竹敬久（精46）の諸氏のテーブルスピーチが行われ会場の雰囲気が盛り上がった。

予定の二時間がまたたく間に過ぎ庄司克雄の閉会の辞により、明年の東京における再会を期待しつつ終了となった。

この総会は設立総会以後、初の通常総会であったが、出席者は機械系58、精密系32、教官2、学生42、計134名と少なかったのは残念であった。

左端は宮坂名誉会長夫人、前列中央は玉手会長、右隣は杉山一彦氏

事務局より

◎会計年度末が三月末になったことに関連し、平成八年度から総会は、毎年五月開催となります。次回は多数の参加を希望します。

◎**同級会（同期会）**の報告・記事を八百―千字位にまとめ、記念写真一葉を添え同窓会事務局・編集幹事あてに送って下さい。同窓会ニュース原稿と朱書のこと。受付随時。

◎**同窓会誌にご投稿を!!**　テーマ自由。約二千字。同窓会事務局・編集幹事あて。同窓会誌原稿と朱書のこと。十月十五日までに到着の分は二号掲載予定。編集都合上、次号まわしの場合はご了承下さい。

◎**住所変更**の場合、ご連絡下さい。同時に旧住所の最寄り郵便局で新住所あて回送手続きをとって下さい。

◎**海外に駐在**される方は、駐在先の住所をご連絡下さい。帰国後は直ちに現住所をお知らせ下さい。

平成7・8年度収支決算書

（単位　円）

平成7年度　自　平成7年11月11日　至　平成7年12月31日

収入の部 費目	金額	支出の部 費目	金額
設立一時立替金	1,500,000	設立準備費	54,590
銀行預金利息等	172	事務費	
		通信費	377,675
		交通費	30,000
		人件費	30,000
		雑費	21,460
		雑誌発行費	
		通信印刷費	69,216
		発送費	3,920
		次年度繰越金	913,311
合計	1,500,172	合計	1,500,172

平成8年度　自　平成8年1月1日　至　平成9年3月31日

収入の部 費目	金額	支出の部 費目	金額
前年度繰越金	913,311	事務費	
会費	8,036,390	通信費	243,484
航空工力精密		事務機器費	560,732
同窓会より寄付	1,600,000	事務消耗費	80,859
広告収入	848,146	人件費	83,430
口座開設金		会議費	4,522
（立替）	10	雑誌発行費	
銀行預金利息等	1,459	通信印刷費	1,156,859
		発送費	1,334,640
		弔電費	2,492
		口座開設金（返却）	10
		各種送金手数料等	91,613
		次年度繰越金	7,840,675
合計	11,399,316	合計	11,399,316